筑前國續風土記　卷之九目錄

御笠郡　下

水城　水城關　刈萱關
御笠森　白川　漆川
城山　蘆城　野山川驛
筑紫神社　筑紫村　原田村
續命院　衣掛天神　雜餉隈
筒井村　九郎天神　乙金
唐山　中村　牛頸村
武藏村　天拜山　龍王瀑布
荒穗明神社　湯町　塔原
天山　古賀村　二日市
紹運塚　紫村　針磨
平等寺村　片野山家
御手水瀑布　大鍋　小鍋

筑前國續風土記　卷之九

貝原篤信　選定
貝原好古　編錄
竹田定直　校正

御笠郡　下

○水城

日本紀を考ふるに、天智天皇三年筑紫に於て、大堤を築て水を貯ふ。名付て水城と云よし記せり。是太宰府の要害の爲に築せられたるなるべし。稱德天皇天平神護元年、太宰小貳采女朝臣淨庭、水城を修理する專知官とせられしよし、續日本紀に見えたり。今其堤を見るに、高さ五間、根盤二十七間、東西に長き事八町許にして、其間たえて堤なき所一町許有。堤の內は田と成て水を貯へず。元祿十二年此堤の邊の田を掘しに、大なる木二有て掘出しける。長さ三間許、小口二尺餘有。一本は杉、一本は朽て見分ず。

此土堤を築し時の臺木なるべし。東西の間堤なき所より、水は北の方に流る。誠に世に類ひ少き大堤なるべし。其の東の大路の筋に、門の址にや、大なる礎猶殘れり。水城の關と云へるは此所なるべし。

萬葉　大伴卿

ますらをとおもへる我や水くきの
みづきのうへになみだのごはん

名寄　俊賴

かき絶てみづきに成ぬ是ゃさは
こゝろづくしの門出なるらん

長房

夏玉

くもりなくすむと思ひしみづきより
やみにまどひてたち歸りぬる

○水城關

大貳高遠

夫木

岩垣の水城の關にむれむかふ
うちのこゝろもしらぬ諸人

詞書に、此歌は筑紫へまかりけるに、府に入日、水城の關に、小貳府官などむかへに集り來りけるによめりと有。水城の大堤の東の山際に關の跡有。大なる礎石など有。即今の大道也。一說に、水城の關肥前にありとす。あやまりなり。其故は太宰府に入日、道遠き肥前に行べきやうなし。且府に入日、太宰の小貳府官など迎に來らば、此地なる事うたがひなし。

夫木　光俊

夕霧やたちへだつらん岩垣の
みづきの關に舟もかよはず

○刈萱の關

通古賀村の境內、宰府往還の道の西の側に、其址有。世に天智天皇の時、置れたる關なりと云 按るに、日本紀に、天智天皇三年對馬島、壹岐島、筑紫國等に關守を置ると有。此時の事なるべし。關守の居たりし所の趾とて、其邊道の東に有。此關も太宰府の警固の爲に置れたるなるべし。永享十年箱崎櫛田住吉

の三社の燈油を調、此關を故なく通すべきとの文書、猶箱崎神職の家に持傳へ侍りぬ。又宗祇が筑紫紀行にも、刈萱の關にかゝる程に、關守立出、我行末を怪げに見るも怖しと書り。宗祇は文明二年に筑紫に下れり。此時迄猶此關ありけるなるべし。其後筑紫の大亂の時、關もなく成けるにや。凡此大路は博多より九州へ通り、九州より博多へ通ふ道也。博多は又九州の要津にて、廣肆なれば、人馬の繁く行歸る事東海道に次り。故に非常を警めん爲に、鎮西府なくなりて後も、近代まで關を置れしにや。筑前國刈萱何がし、高野山に入て僧と成しを、其妻子尋行て、妻は高野山の麓にて死す。其妻を彼夫の僧弔ひし事、世俗に云傳へて、俗謠にも作りうたふ。其妻の墓、高野の麓、かぶろの宿と云所にあり。かるかや何がしは此所の人なるべし。

新古

刈かやの關守にのみ見えつるは

菅家

人もゆるさぬ道べなりけり

光　俊

類聚

いつよりかこゝろにそへて身にもなる
おもひみだれし刈かやの關

藻鹽草

せばくともしのやの軒に宿からん
夕だち過るかるかやの關

宗祇法師此所にてよめる歌

數ならぬ身をもいかにと事とはゞ
いかなる名をやかるかやの關

○御　笠　森

山田村の境内なり。雜餉隈の東北の邊にあり。大道より二町ほどあり。むかしは大木多くありて、茂れる林なりしが、今はむかしの森のしるしとて、楠二株殘れり。むかし此所に大なる楠あり。其もとのうつろなる所、方二間あり。その梢は今も其所にたふれてあり。神功皇后羽白熊鷲を討んとて、宇瀰の宮より松峽の宮にうつりたまふ時、道にて御笠を飄風

の爲に吹落されたまひ、此森に掛りける。故に御笠の森と名づくといふ。むかしは此森の下に、神功皇后の御社ありしが、しはすの大晦日の夜は、村中の婦女ども此御社に籠りて、夜をあかしけるに、強暴の惡少年ありて、かの行露のおほきうれへ有しにや。さればこそ、思はぬをおもふといはゞとよめる歌は、妻の夫に對して、ことをのこに、こゝろをうつさゞりしと云誓ごとをよめるよし也。今は社もなくなれり。むかし此所に十六三郎天神あり。今は雜餉隈の東の山田の新村にあり。又むかしは此森の廻りに山田村あり。近年雜餉隈いひがしのかたはらにうつせり。

津守國冬

新千

大野なる御笠の森のゆふたすき
かけてもしらじ袖のしぐれは

太宰大監大伴百代

萬葉

思はぬをおもふといはゞ大野なる
美笠の森の神ししるらん

名寄

大野なる御笠の森に時雨ふり
そめなす紅葉今さかりなり

現存集

大野なる御笠の森のほうかしは
神のしらてしいくよさすらん

○白　川

今の宰府の天神の御旅所の西南にあり。二日市に近し。後撰集十七卷に、筑紫の白川といふ所にすみ侍べりけるに、大貳藤原興範朝臣のまかりわたるついでに、水たべんとてたちよりてこひ侍ければ、水をもていでゝよみ侍ける。

檜垣嫗

としふれば我黒髪もしら川の
みづはぐむまで老にけるかな

檜垣嫗集に、老はてゝかしらのかみは白川の、みづはぐむまで成にけるかな。大和物語には、むばたまの我黒髪は、白川のみづはぐむまで成にけるかなとあり。一説に、白川は肥後にあるよし、釋日本紀に、肥後

國風土記を引ていへり。彼國の土人もしかいへるよしきこゆ。されど太宰の大貳のまかりわたりて、水こひし所なれば、太宰府に近き所を是とすべきか。又大和物語には、純友がうての使に、大貳小野好古下りて、檜垣のおうなが家の在りしわたりをたづね、いみじくあはれがりて、よばすれど、はぢてこで、歌をよみけるよし見え侍る。今古書をかうがへ見侍るに、純友はおほやけに叛きて、四國より太宰府へにげ行しを、小野好古是を追ひて太宰府にいたり、筑前博多にて、純友と合戰せしに、純友いくさ破れて、伊豫の國へにげ歸りし由しるせり。好古の檜垣のおうながの家のあたりを尋ねしは、純友をおひて太宰府にいたりし時の事なるべし。後選集には、藤原興範とかき、大和物語には小野好古としるせり。何れの說にても、太宰府にある白川なるべし。八雲抄にも或筑前と記せり。藻鹽草には白川と云伺名四所あり。山城奥州越中筑前と記せり。此等の書には、肥後にあ

るとは見え侍らじ。又近世印行せし大名寄松葉集など云へる書に、白川を筑前に入しもかゝる故なるべし。

○漆　川

二日市の北なる通古賀と云村の坤の方、四五町にあり。其川の邊の田の名をも漆川といふ。八雲御抄にも、此國にあるよししるし給ふ。宗祇指南抄には、漆川は嘉摩郡漆生と云所にありしといへり。いづれが是なりや、しらず。されども太宰府に近き所を是とすべきか、又同名にてもあるべし。

拾遺雜下

名にはいへどくろくも見えず漆川　よみ人不知
さすがにわたる水はぬるめり

○城　山

太宰府の坤の方、萩原村の上なる高山也。俗に、坊中山といふは、いにしへ僧坊多かりしゆへなるべし。日本紀、天智天皇四年八月に、椽城を築せたまふ由見え

たり。城の山と云も、城ありし故に名付しならん。城址南北二所にあり。北の御門、南の御門と云。南の御門は肥前國養父(やぶ)郡の方にあり。此城にも大野の城に四王院を建しごとく、寺院を建けるにや、むかしは大なる寺院ありて、子院甚多かりしといふ。僧坊の址、山中所々に多し。俗に城山千坊と云て、僧坊多かりし事を稱す。今は一坊もなし。按ずるに、三代實錄に、貞觀八年二月十四日太宰府司に命じ、城山四王院におゐて、大般若經を轉讀せしめたまひし事あり。此時より既に僧坊有けるならし。但城山四王院とは、城山と四王院と兩所にての事にや。若は大城の山の四王院といへる事にや、いぶかし。大城山と城山とは別也。城山いつの時よりか寺院もたえ、僧坊もなくなりたり。歌に、此きの山とよみしも城の山也。紀伊國背の山を、このせの山とよめるがごとし。城山の外に、別にこのきの山ありとするはあやまりならし。萩原より城の山の東をこえて、肥前國基肆(きいの)郡にゆく

道あり。馬往來自由なり。むかしは肥前筑後より此城の山道をこえて、太宰府の方に行し由いへり。今の原田道より近し。肥前筑後の人は、所により今も此道を通る。近ければなり。肥前の方のふもとに城山口とて小なる町あり。筑後守葛井の連の歌を見れば、太宰府より筑後へゆくに、この山道をこえし事明らけし。

大伴百世

萬葉

梅花ひらくはいづこしかすがに
このきの山に雪はふりつゝ

右萃太宰帥大伴卿宅、宴梅花歌、廿六首の内にあり。

萬葉集に、太宰帥大伴卿上京の後、筑後守葛井連大成悲歎作歌一首

萬葉

今よりはき山の道はさびしけん
我がかよはんとおもひしものを

家　隆

玉吟

梅花さくやこのきのやま風に
ころもにほはしおつるしら波

○蘆　城　野山川驛

宰府の南にあり。蘆城の驛とて、むかし宰府より都へ行馬次の宿なり。蘆城より米の山と云所を通りしとなん。

太宰小貳石川足人朝臣、遷レ任ヲ餞ニ于筑前國蘆城驛家ニ。

萬葉

あめつちの神もたすけよ草枕
たび行君が家にいたるまで

同

玉くしげあしきの川をけふくれば
よろづよまでにわすられめやも

同

女郎花秋はぎまじり蘆城野は
けふをはじめて萬代に見ん

萬葉曰、右二首作者未詳

同十二

あしき山木ずえこぞりてあすよりは
なびきたるこそいもがあたり見ん

太宰帥大伴卿被ノ任ニ大納言ニ。臨ニ入京之時ニ府官人等餞ニ卿ヲ筑前國蘆城驛家ニ歌四首内。

防人佐大伴四綱

萬葉

月夜よし河おときよしいざこゝに
ゆくも歸るもあそびてゆかん

夫木

うき事をおもひつくしの蘆城山
歎きこりつむ年や經ぬらん

名寄

玉くしげあしきの川の瀬をはやみ
明行月のかげぞながるゝ

後九條

夫木

ふる雨の曇る五月の花がた
あしきの川は水まさ

○筑紫神社

延喜式神名帳に、御笠郡筑紫神社一座、大名神とあり。此社は原田村にあり。原田村の隣村に筑紫村あり。始は原田村も筑紫村の内也。後に別れて兩村となる。村より北に林あり。其内に御社ありて南にむかへり。高き所にあり。祭る所の神は、五十猛命なり。後世

相殿に竈門明神をも祭り侍る。是御笠郡の惣社なる故、勸請せるなるべし。三代實錄に、清和天皇貞觀元年正月廿七日、筑前國從五位下筑紫神に、從四位下を授奉らるとあり。又陽成天皇元慶三年六月八日、筑前國從四位下筑紫神に、從四位上を授たまふよし、しるせり。筑後國風土記に云、筑後國はもと筑前の國と合て一國たり。この界の上に庶猛神あり。往來の人なやまされて半ば死に及ぶ。其數極めて多き故名付て人命盡(つくし)の神と云。時に筑紫君肥君(肥州の君なり。)等是をうれへ、今筑紫君等の祖甕依(みかより)姫を祝として是を祭る。然りしより此かた、行路の人神の害を蒙(かうむ)らず、こゝを以筑紫の神と云。(釋日本紀に引之)此說を以て　れば、此所は則兩筑肥前の境なれば、風土記の說に符合せり。筑紫氏則當社の神司にして、始は社のほとりに居れり。(筑紫村に宅址あり。)後に兵革(へいかく)をわざとして、天正の比武威を近隣にふるひし筑紫上野介は、此社司の後裔なり。享德二年筑紫能登守經門、同左近將監俊門此

社を造營せるよし、棟札にあり。近き比に至て、甚破壞に及びしを、天和の初村民等力をあはせて、新に御社を造立す。十一月中の卯日に祭あり。御社にまうでゆく坂の下に御池かたばかりに殘れり。その西の方に神井あり。清水也。石の鳥居は元祿十四年の春建立せり。其鳥居の額の文字は、篤信の乞によりて、花山院内府定誠公書たまふ。

○筑紫村

原田村の隣邑なり。始は原田村と此村と合て一村たりし事前にしるせり。村の東の方に小高き山あり。是を城の腰といふ。筑紫氏筑紫社司たりし時住せし宅の址なり。

○原田村

肥前國田代に通る宿驛也。此宿の西九町に、肥前筑後筑前三箇國の境、大路の東小山の上にあり。三國境と云。此村は筑紫村の内也。後わかれて二村となる。

○續命院

太宰府の西南にある村の名なり。むかし九國二島より太宰府に來りし民、若くは久しく逗留し、病をうけて死し、或餓死する者多し。太宰大貳小野岑守と云し人、是をあはれみ續命院と云ふ家をたて、田地をつけて病をやしなひ、飢を助く。續日本紀第四卷承和二年十二月、辛未朔癸酉の條下に云、故參議刑部卿四位上小野朝臣岑守、前太宰大貳となる。時に續命院一所を建て、以て往來の舍宿に備ふ。但公力によらずんば長く存する事を得ざらん事を恐れ、すなはち本意を叙して、具に解文を修して曰。管九國二島之民。或公或私。往來相續。其求輕者。暫經時月。其事重者。竟歲始還。客宿於府倉下。賃寄於閭閻之間。若病纏身手足不隨。官舍督察非養病之處。王家爭趣皆惡死之人。遂使露臥道路暴死風霜。縱有時得瘥愈。亦以飢寒死者。十而七也矣。見其如此心深救恤。聊建續命院一處。檜皮葺屋七宇。鼎一口。墾田百十町。以擬飢病有志無力。庶

幾萬一。地隔人遠執檢難レ周轉以屬レ人。更增二疎廢一。若遂不レ因二心力一。恨心願之從レ己。伏望令下府監或典一人及觀音寺講師勾當其事上。相替之日。一事已上皆依レ實勘謝。若不レ加二修理一。令レ致二破損一。及非法費用之類。並以二官法一論二此文一。いまだ上聞するに及ばず。岑守物故す。其家大臣に就いて追て以て陳請す。勅詔有て曰。思レ撫二黎民一。不レ忘二鑒寢一。宇縣負遠无レ聞二控告一。見二此弊納一。爰知二忠槩一。速令二所司一。俾レ允レ所レ請。勾當之官。迁替之日。與奪解由一准二國司一。又類聚三代格の承和二年の格に、續命院一所、太宰府の南にあり。檜皮葺屋七宇、墾田十四町、小野岑守解備云々、日本續後紀にあると同じ。是を以て見れば、續命院は誠にめぐみ廣き設けなりしが、院はいつの時にか絶けん。今は村の名と成ぬ。近き世には、訛て俗明院と書こそ猶淺ましけれ。村中に其院のありし址かつて懇に尋しに、今はしれず。

○衣掛天神

國分村の境内、水城町の南なる田の中にあり。菅公宰府に赴きたまはんとて、此所にて衣服を改め、其なれきぬを脱て、掛させたまひし石とて今にあり。故に其側に小き社を作りて、衣掛天神と號す。

○雜　餉　隈

御笠森の西にあり。宰府へゆく大路に町あり。此町兩郡二村にかゝれり。東側は當郡山田村に屬す。西側は那珂郡井相田村に屬せり。此所宰府參詣の人の足を休むる所にて、酒食を品々あきなふ肆ある故、雜餉隈と名付けるにや。又むかし太宰府官人の雜掌居たりし所なるか、いぶかし。町の北のはしに西へゆく道あり。是より春日原を通りて、城下藥院口に行、其道近し。

○筒　井　村

雜餉隈より南に近き村也。村中に筒井とて清水あり。木の筒を以て井韓とす。此故に村の名をも筒井と云也。其水極て清冽にして、大旱といへども涸ず。常

に筒の上に湧上る。只冬至の夜ばかり水出ずと云。

○九郎天神

筒井村の境内也。村より北の方、大道の側、東の方に林あり。其中に叢祠あり。俗には盗の宮と云。菅公に二十四人の御子あり。行輩の次第によりて、數を付て九郎天神とよぶ也。長政公の時、博多の者盗の虚名をうけ、事急にして遁去けるを追かけらる。爲方なくて此林中にかくる。是を捜せども終に見へず、其難をのがれ、虚名を晴しけるより、盗の宮といふとかや。一説留主殿とは、宰府天神社官の家號也。留主より此社の祭を司どりし故、留主殿の社と號せしをとなへあやまりて盗の宮といへり。

○乙金

むかしは弟鐘とかけり。相傳て云、むかし唐土より日本に三の鐘渡れり。最後に渡りし鐘を弟鐘と云。鐘のわたりし次第を以て名付たり。初は四王寺に在しが、兵亂の時此邊に埋し故、弟鐘村と名づく。今

はあやまりて乙金と稱す。

○唐（から）山

乙金村の東にある山也。此あたりにてはいと高き山なり。東のふもとは宇瀰村のむかひ井野村也。乙金村の方より、から山の南の谷間を通り、ひきく嶺（たうげ）を越て、宇瀰の河内に通る道あり。一里に近し。井野の南に出る也。

○中村

乙鐘村に隣りて、同じ谷中にある村也。此村と席田郡金隈村の間、則兩郡の境也。

○手頸（くび）村

天判山の西北に有て、山の間にある村也。谷中長廿四五町あり。上村の間にひきく長き山あり。其形手の首をのべたるに似たり。故に名づく。手頸村の谷下は那珂郡春日村也。

○武藏村　武藏寺

此村は天拜山の下にあり。林木山につゞきてうるは

しき佳境也。長政公筑前御入國の初、御笠郡を小河内藏允に預け給ひ、此邊にて一萬石餘の領地を賜り、天拜山の麓、帆足屋敷（帆足氏は國士也。天正の比肥前國勝尾の城主筑紫氏に從ひし帆足彈正と云しもの此所に住せり）と云所に新に宅をかまへたり。其嗣子小河平右衛門常章が時に到りて、山の口と云所、山水清潔の地なればとて、小舍を作りて、櫻花盛の時、横岳山の江雲和尚などを請して、花を見し事有りといふ。其養子小河權兵衛直常、蜂の隈と云ふ所を切開き、大きに第宅を經營し、四邊に竹木を栽へ、門前に馬場を作り、帆足屋敷、山の口兩所は家士の宅とす。凡此邊は肥前國の境なれば、天拜の大山に據り、飯盛城の舊址につゞきて、頗要害をなせり。其後光之公より、此邊を吉田六郎太夫增年に賜り、七千石餘を領知す。貞享年中又改めて立花勘左衛門增弘（後改吉左衛門又號新助）を笠郡の惣司とし給、此邊にて六千三百石餘の領地を賜り、蜂の隈の宅を修造す。其家士此村及近村所々に多く在宅す。元祿二年の冬、綱政公蜂の隈の

宅に來遊し給ふ時、增弘饗を奉る。同四年の冬も又綱政公來り給ふ。黑田長淸公、長重公も此宅に來臨し給ふ。今增弘が嗣子吉右衞門增能に至り相續せり。

○武藏村の境內蜂隈と云所の邊に花山と云所あり。其所に寬永の比、次郎右衞門と云富農あり。其心ばせやさしき者にて、極て花をこのみ、我宅の邊なる山に花木を數百株うへ、園中には石をおき、朝夕花を見てたのしみとす。方二間高五尺ばかりに土臺を築き、其上に茅舍をかまへ、花を見る所とす。珍花ある事をきけば、遠きをいとはずして行て乞求めける。伯樂が厩には良馬多く、卞和の匱には美玉多き理なれば、名花珍卉多くあつまり、いかなる富貴豪族の花園にもまされり。これを以て身を終る。人其山を號て花山とす。むかし大江佐國が甚花を愛して、六十餘回看不レ足。他生定作ニ愛レ花人一。と作りしに似たる、花數寄なるべし。詩歌をもしらぬ山かつにもかゝる風流なる者あり、めづらし。其後相續て花を玩

ぶ者なければ、花園は其址のみのこれり。

○武藏寺椿花山成就院と號す。武藏村にあり。本尊は藥師佛也。傳敎大師、御笠郡山口村木屋町山より十二枝ある山茶を切取て、此佛像を刻めりと云。脇立に十二神あり。又大黑天の像あり。是も傳敎の作と云。此武藏寺は虎丸長者と云者造營し、むかしは大寺にて堂塔も多く、子院七坊ありしと云。正法寺、善正寺、宗正寺、蓮花寺、地藏坊、石水坊、池上坊是也。池上坊は日蓮宗の僧武藏國池上より來り住る所也と云。今に其址あり。傳說に虎丸長者此寺を造立せしとき、いまだ成就せずして死す。時に武藏國池上より日蓮宗の僧來りて、作り終りぬる故に、武藏寺と號し、村の名をも武藏といへりと云。然れども武藏寺は猶久しき寺と聞ゆれば、彼僧もし此寺の廢壞を再興せしにや、大門のありし塔原村にあり。今も大門と云、むかし此寺にて春初に追儺せし事は、前に記せり。又今に至る迄每年十月十五日に、地藏

會供養を行ふ事あり。是は虎丸長者武藏村、井手古賀村、塔原村、萩原村、山口村、此五ヶ村に七十五ヶ所の別業ありき。其田を作る農人より、地藏會の供養をせしが、七十五所の內二十五所づゝ集りて、三年に勤む。是虎丸長者が時よりの定式也と云。虎丸長者が本宅は、古賀村の內すたれと云所にありしとかや。今も其宅の跡あり。武藏寺の側に虎丸の墓所在。石塔あり。此寺に忠之公の時寺產五石寄進せらる。宇治拾遺下卷の二、出家功德の條に、筑紫の武藏寺の事をしるせり。むさしてらとも書り。此寺の事なるべし。其事奇誕なればこゝにしるさず。或說　齋明天皇上座の郡　朝倉の行宮にとゞまりたまひし時、御湯浴の爲にむさし村に行幸ありしと云。

○天　拜　山　或天判山と云

武藏村の上にあり。此山むかしは滿山芒（すゝき）のみ生（おひ）て木なかりしが、長政公の宰臣小河內藏允此郡を司とり、此所を領せし時　國用軍用のため、諸木の種を蒔き

苗を植て甚功を用ひ、木を伐る事堅く制しける故、年を經て衆木長じ、茂山となれり。頂に天神の社あり。世俗に云傳へ侍るは、延喜二年菅公、此天判山にのぼりて罪なきよしを、天にうつたへさせおはしましければ、天帝より天滿大自在天神といふ尊號を下し給ひしとかや。或勅號とも云、又は神託とも云なり。菅公の天を拜したまひし所、則此御社の地なり。石上にのぼりて天を拜したまひけると云。其石を天拜岩と號し、御社の内にあり。此故に天拜山と號す。御社東にむかへり。祭は八月廿五日也。八月廿三日の曉、天神の御輿榎寺の御旅所に行給ふ。其前廿二日の夜より、此御社の前にて篝火(かがりび)をたく。此上に櫻木多し。花の時は遊觀するに堪たり。

○龍王瀑布

武藏寺の側にあり。其傍に高き石たてり。是を衣掛岩と云。菅亟相此瀑(たき)にうたれたまふ時、衣をかけ給ひし石とかや。たきの下、川の中に、石塔あり。詩を

彫付たり。

天判峯頭仰ニ彼蒼一。願心成滿放ニ威光一。
御衣薫レ石ニ成レ塔。五百年來流水香。

正平二十年二月二十五日　願主　大僧都信聰謹題

○荒穗大明神社

天判山の上、大岩の間に小き社あり。東に向へり。上なる岩は横二間半、高三間許有。下なる岩は横三間高一間許あり。この岩上下の間一間半程、横一間ばかりの間に社あり。此社は肥前國基肆郡宮の浦村の荒穗明神の社を勸請せり。俗說には瓊々杵尊を祭れる所なりと云。九月十九日祭あり。肥前國宮の浦村の荒穗明神の社は、近鄕の惣社にて、大社也。九月十九日祭禮あり。御旅所に出たまふに其行粧いかめし。宮浦村は城山の南の麓にあり。城山口の上なる御笠郡萩原村より近し。此社むかしは城山の上にありしと云。いつの時よりふもとに移しまいらせしにや。

三代實錄第四卷、貞觀二年肥前國從五位上荒穗大明

神に、正子位下を授らるゝよしゝるせり。西峯老人云、神代卷上卷云。初五十猛神天降時。多將樹種而下。然不殖韓地。盡以持歸。遂始自筑紫。凡大八洲國之内。莫不播殖而成青山焉。荒穗明神は五十猛神なるべし。筑紫は此神有功之最初之地故、肥前筑前に其跡をたれたまふなるべし。瓊々杵尊とは俗の附會せる說なるべしといへり。

○湯　町

武藏村の境内也。武藏寺より五町、宰府より此所迄は廿九町あり。溫泉四所にあり。癬瘡をよくいやす功ありとて、遠近より來り浴する者多し。無題詩集に、釋蓮禪が著長門壇即事の詩に、

夜憶遐鄉終人夢。晴望孤島小□□。
一尋西府溫泉地。治病逗留及兩年。

此詩にある西府溫泉地は、此武藏の溫泉の事にや、又北谷の湯原にありし溫泉をいへるにや。

○塔　の　原

村の前なる圃の中に、十王堂の址あり。今に礎のこれり。其所を今も十王堂と云。むかし此所に塔あり、遠くより能見ゆ。此塔ある故に塔の原といひしとかや。

○天山（あま）

藻鹽草に、雨山を筑前とす。古歌あり。然れば此天山の事なるべし。天山村の上に天山と云山あり。

雨山（藻鹽草）のあたりの雲はうちつけに
くもりてのみぞ見えわたりける

天山の内、西方寺と云所の上のさし出たる山に、大岩二あり。いづれも上に岩かさなれり。其外に岩多し。又大岩の下十二間許に、うつほ船とて船に似たる石あり、長二間横一間ばかりあり。岩は上下共に皆西にむかへり。此上下の岩ある所を、すべて里民は童（どう）男卯女（なんくわんぢよ）が舊跡と云。今其里の老人にとふに、其いはれをしれる者なし。童男卯女は秦の徐福が蓬萊に渡りし時、舟にのせ來りし男女のわらはの事なり。童

男卯女が岩と云所、筑後國上妻郡河崎の里にも、丹後の海邊にもあり。みだりに附會して名付しならん。

○古　賀　村

武藏村の南にあり。村の内、すだれと云所に、虎丸長者が宅址あり。其別墅十一所あり。其所に長者墓として二あり。虎丸が事は前に詳にしるせり。

○二　日　市

むかしは一月に二日市立し故、町の名とす。今は市たゝず、町のみあり。町より東の方に城址あり。古城記にあらはす。

○紹　運　塚

二日市村の艮なる高き岡の上にあり。高橋紹運の頸をうづめし所と云。是薩摩勢紹運の頸を取、實檢の後此所に埋たるなるべし。長二間二尺ばかり、横七尺許なる塚也。近き世にはめづらしき忠臣義士の墓なれば、いとたふとむべき事にこそ。

○紫　村

二日市村の隣邑也。菅家の御歌に、

つくしにもむらさきおふる野べはあれど
なき名かなしむ人ぞきこえぬ

此歌は則此村の事をよみたまへるにや。

○針磨

民俗　云傳るは、菅公天判山にて、罪なきよしを天に訴へたまひし後、此所を通りたまひしに、老翁ありて、斧を石にあてゝすりけるを見給ひて、何にかするとゝひたまふ。老翁聞て針にすり侍るよしを答へける。爰におゐて菅公感じたまひて、凡の事精勤せずしては、成就し難しとて、又天判山に上り給ひて、ひたすらに天に祈りたまひしとかや。其老翁が針をすりし石とてあり。始は山のふもとに在しを、近世通路の側、林の中に移せり。長七尺九寸五分、横五尺一寸五分あり。扁石なり。凡針磨と號する所、此所のみにかぎらず、鎌倉極樂寺の南七里濱に出る路の小橋をもはりすり橋と云。また近江國に磨針嶺

あり。磨針嶺と名付し事、むかし物ならふ人、志屈(くつ)していなかへまからんとて、近江國を通りける時に、或人斧を石にてとゝ者あり。何のためぞとゝへば、針にする也と答ふ。かの人さてはかうやうの人もあるぞかし。吾こゝろざしは無下におとれりとて、又都へ上り、學問して終に博士(はかせ)となり、其所をすり針と名づくと云傳ふ。因て思ふに、劉氏が鴻書に、錦繡萬花谷を引て、昔李白書を象宜(しゃうぎ)山中によむ、いまだ成らずして棄去ぬ。小溪を過て老媼(うん)に逢ふ。まさに鐵杵(てつきよ)を磨す。因て問て云、何にかする。媼答て鍼に作らんと欲すと云。太白其意に感じ、還て業を卒ふ。媼みづから姓は武なりと云。今に溪傍に武氏巖ありとしるせり。此事此村翁のいひ傳へと暗に相合へり。○此村は御笠郡の水南北にわかれ流るゝさかひ也。此村の内本村の邊よりながれ出る水は南に流れ、千年川に入る。原町より流るゝ水は北に行て、博多に出る。又油須原より流るゝ蘆城(あしき)川は南行して

千年川に入る。宰府の川は博多に流出づ。

○平等寺村

山口村より一里餘あり。本は山口村の内にて上山口と云。然ども平等寺といふ寺ありし故、近代は村の名とす。此寺は禪宗にて本尊は藥師佛也。薩摩勢岩屋の城を責し時、あふれ者共此地にも亂入し、寺にも火をかけて燒けるとかや、今も其寺址に小き草庵をかまへて、むかしの本尊ありし藥師佛を安置せり。凡此地は深山幽谷にして地高し。寒氣烈しく、陽氣おそし。故に冬春は雪深く、盛夏にも蚊なし。是より南の山を越えて、肥前國田代に行道あり。

○片野

むかし般若寺と云寺ありしと云。今は圃と成りぬ。今も其所に七重の石塔あり。いかなる寺なりしにや詳ならず。

○山家

豐前小倉當國の黑崎、木屋瀨、飯塚、內野をへて、

此宿に來り、是より西原田へ行き、それより肥前田代を過て長崎の方に行く東西の通路にて、宿驛なり。町あり、國君の新館あり、民家多し。又博多より二日市を經甘木に行き、筑後豐後へ通る。南北の大道も此宿の少西にあり、近し。

○御手水瀑布

山家村より十五町許、東池田と云所にあり。大道の東にあり、小流也。岩を傳ひて下る。上の段高さ七間許あり。三條にわかれ流る。下に二間ばかりの瀑ありて、其下に又五尺許の瀑あり。然ども並に佳觀には非ず。瀑の前に觀音堂あり。此瀑は山家川の本流にあらず。側の小谷より出る水也。

○大鍋小鍋

山家村の東に鍋嶺と云坂あり。山家の町より一里十町許あり。其坂の上より北に山家川の上流あり。大道の下なり。川の底に長三十間餘の大岩ありて、其岩上を水流る。岩の兩方は土にうづもれて見えず。

横三四間許は現れ見ゆ。其三十間許の間水流るゝ所くぼく、其間深き所五六箇所あり。中につゐて最下に瀑あり。淵あり、是を大鍋と云。甚深し。其上に小鍋とて恰鍋の口のごとく、人力にてうがてるごとくなる深淵あり。徑一間あり。其深き事、むかしははかり難しと云。今は繩に石を結び付、さげて見るに、八尺ばかりあり。水の色黑くして底見えず、其上に段々深き所あり。此岩の上を水流るゝによりてことなる見所也。

○山家牧

冷水嶺の南に、長政公の時壯立給ひし馬牧の址あり。東西長一里許、南北又然り。まはりに土手あり。此牧は山家村及夜須郡桑野曲村、穗波郡内野村に懸れり。内野山より狼出て馬をなやまし、且雪ふかき故育せず。故に長政公の時牧馬やみぬ。

筑前國續風土記卷之九終